
君が好き

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が好き

【Nコード】

N4157E

【作者名】

冴川明希

【あらすじ】

不二が撮った越前の写真を巡る、不二と手塚の少し病んだ日常会話。手塚が越前を溺愛して少し壊れてます。塚リヨ前提のギャグ。

（前書き）

友人サイトに別名で捧げたものです。

リヨーマは可愛い。

とてつもなく可愛い。

何もかもが可愛い。

言動のどれをとっても愛おしくて仕方が無い。

「……って、まさにそんな感じだよね、君」

不二周助は盛大な溜息と共にそう言った。言葉の向かった先は青学のキングと呼ばれ、畏れられる手塚国光その人である。

「……うるさい」

「そんなことはない、って否定できないあたりが、もう……ね」
このメロメロ星人め。

はっと笑いながら不二は肩を竦める。しかし、嘲われた方はそれ所ではなかったようだ。手塚は手許にある数枚のカードを真剣に見詰めている。

カードは写真だった。どれもぴたりと焦点が合っており、構図も申し分無く、撮影者の腕の高さが窺えた。そしてその焦点には必ず一人の少年がいる。濡れたように黒い髪。遠目にも判るバランスの良い体躯。少しきつめの印象的な瞳が、額に掛かる前髪越しに覗いている。

レンズはその少年の様々な表情を、実に的確に捉えていた。

ある一葉では、少年は木陰で一息ついていた。トレードマークともいえる白い帽子が、投げ出された脚の上に無造作にある。上方から撮ったのだらう。この距離感だと、二階辺りか。

そしてその一葉を繰る。先程と連続した状況のようだが、随分印象が違う。一枚目は全体を何気なく切り取った、雰囲気重視したもののであるのに対し、二枚目はズームを効かせ少年の表情にポイントを置いている。睫毛が頬に影を生み、口元が僅かに緩んでいる。瞳

を伏せているのだ。普段の彼を知る者ですら滅多に拝めない様な和んだ雰囲気。隠し撮りされたのは明らかだった。

喰い入る様に写真を見詰める手塚の目の前に、不二はぴらっと右手の掌を差し出した。

「一枚五百円」

「……ネガ付き」

「却下」

「それはこっちの台詞だ！だいたいこれは立派な犯罪だぞ！！肖像権の侵害だ」

「それを買う君はどうなのさ」

「……こ、恋人の特権だ」

「ふっ」

「今、馬鹿にしただろう！」

「別に？」

不二はやれやれと首を振ると鞆から封筒を抜き出し、手塚に手渡した。手塚は中身を覗き、ネガの存在を知る。

「本当に、やめてくれないか」

「僕だって売る相手は選ぶよ」

「……」

黙り込んだ手塚に不二はこめかみを押さえる。

「ああ……今の君の心の声が聞こえるようだよ。こんな可愛い越前を写真に撮る……つまりは僕がその可愛い越前を見ている訳だ。君が見ていないにも関わらず！それが悔しくて仕方ない、だろ」

手塚は視線を彷徨わせ、財布を取り出す。

「商談成立……毎度あり」

不二がその場に存在するものの中で一番鮮やかに微笑んだ。

「おまえ、いい加減にしておけよ」

結局きつちりと金を払い、手塚は釘を刺す。刺された不二は悪びれる気配も無くぷいっと横を向いた。

「だってカモが直ぐ傍にいるんだもん」

居るほうが、悪い。

不二はてつきり手塚がそんな馬鹿な、と反論してくるものと待ち構えていた。無茶な論理だとは承知している。それをどう凌いでこの友人の眉間に皺を刻ませるかが腕の見せ所だ。

だが さあ来い！という不二の意気込みは、思いもよらぬ返答に遮られた。

「だもん……！だもん……だと！？」

「普通さ、カモの方に反応しないかい？正面切ってカモだと言われてる自覚は君には無いの？」

「だもん……リョーマが」

どこか遠くを眺めるような手塚の表情に、瞬間不二は悟った。トリップか。

『だもん』のたった一言で越前にトリップか！

不二のその推察はきつと正しい。何事かをぶつぶつと呟く手塚はもう既に不二を眼中に納めていない。

「はいはい、昨日越前君が何かの拍子にだもん、って使ったんだね。それが君のツボにクリーンヒットしちゃったんだよね。よく解ったから。この越前メイニア。まったく、越前もこんなヘタレのどこがいいんだか……」

結局、自らの懐が潤えばそれで良いのだけれど。

手に入れた写真を大切そうに鞆に仕舞い込む友人に、不二は少しだけ、その将来を心配したのだった。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4157e/>

君が好き

2010年10月14日13時17分発行